

越ヶ谷宿・三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠

木原 徹也

江戸時代の越ヶ谷宿で質・古着商を営む内藤家は、屋号を「三鷹屋」と称した。この三鷹屋第八代当主の嘉兵衛は、天保二年（一八三一）、当時三十三歳で、家族構成は本人、母、妻の三人に、下男、下女の合わせて五人と馬一頭であり、持高は十五石八斗六升五合で、宿場内の主立ち商人であった。



三鷹屋嘉兵衛寄進の石燈籠

嘉兵衛は、文政七年（一八二四）九月、眼病を患い、これが思わぬ大病となり、何人もの眼科医の治療を十二月まで受けることとなってしまった。この折、嘉兵衛は駒木村（現・千葉県流山市）の諏訪神社に眼病平癒を祈り、十か年の内に石燈籠を寄進する旨の心願を掛けた。

駒木村の諏訪神社とは、現在でも「駒木のお諏訪様」として親しまれ、例年八月二十二日、二十三日の例大祭には、大勢の参詣人が訪れる。

社伝によると、藤原氏との政争に敗れた高市皇子の後裔の者達が東国に流れ、大同二年（八〇七）、信濃国の諏訪神社の御分祠を現在地に鎮座したのが創建であると伝えられている。

その後、後三年の役（永保三年、一〇八三）には、奥州に向かう八幡太郎義家が戦勝を祈願し、帰洛の途には、乗馬と馬具を奉献したとの伝説が残っている。江戸時代になると、多くの江戸町民が成田山詣での途中、諏訪神社に立ち寄るなど、近郷近在の庶民の信仰を集めた有名な神社である。

この諏訪神社に、眼病平癒を祈願した三鷹屋嘉兵衛は、七年後の天保二年（一八三一）に心願通りに石燈籠一对を寄進した。

石燈籠は、高さ九尺一寸（約二・八尺）の小松上石造りで、代金は、十七両二朱（今の約二七〇万円相当）だった。奉納供養には、別当成願寺への奉納金二両（約三十二万円）をはじめ、関係する社僧への奉納や、石工・鳶・茶屋など多数の関係人への祝儀など、石燈籠代金と合わせ総

額二十四兩三分と八十三文(約四〇〇万円)もの費用を掛けていた。

この三鷹屋嘉兵衛が寄進した石燈籠については、かつて本間清利氏が『越谷の歴史物語 第一集』で紹介しているが、なんとか現物を見たいものと、平成十八年八月に諏訪神社を訪れた。鬱蒼と樹木が生い茂り、長い歴史を思わせる参道を通り、正面社殿の外拝殿左右に建つ一對の大きな石燈籠が三鷹屋嘉兵衛の寄進した石燈籠だった。社殿に最も近い所に建てられ、大切に扱われている様子がかがわれた。左右の石燈籠の基部には、「願主越谷宿三鷹屋嘉兵衛」との文字が大きく刻まれ、社殿向かって右側の石燈籠には「天保二辛卯年 二月吉日」と「戸ヶ崎 石工幸右エ門」と刻まれている。しかし、意外だったのは、左側の石燈籠の裏面に「大正三年五月廿三日 米村定八 再建」と刻まれている。良く観察すると、石の質や石の新旧が異なる所があるようにも見える。大正年間に全く新しく造りなおしたとは思えないが、後から何か手が入った様子は感じられた。それにしても、「米村定八」とは、どのような人であったのか、三鷹屋(内藤)嘉兵衛の親類の者なのだろうか。

社務所を尋ね、宮司さんに、この石燈籠について何か記録や言い伝えがあるかを伺ったが、残念ながら何も残っていないとのこと、これ以上の成果は得られなかった。

千葉県流山市内の著名な神社に残る一對の石燈籠から、江戸時代の越ヶ谷人の信仰と活躍をしのぶことができた。